エッセー「立教ブックレットの刊行にあたって」

立教ブックレット事始

松平　信久

はじめに

立教学院では、2007年度から、「立教ブックレット」と名づけたシリーズの刊行物の発刊を始めた。在校生の皆さんに立教という学校をよりよく知っていただくために、本学に関わるテーマやエピソードを選び出し、毎年2冊程度の頻度で刊行を続けて行く計画である。この小文では、このブックレット刊行のいきさつやねらい、今後の予定などについて書かせていただくことにする。

刊行のきっかけ

学生や教職員など、立教のいずれかの学校に所属する者であっても、「立教ってどんな学校？」と、人から質問された場合や、「自分の所属するこの学校の特色は何だろう」と自問自答しようとするときに、はたと答えに窮し、立ち往生してしまったという経験の持ち主は少なくない筈である。赤いレンガ造りの建物、蔦のからまる校舎や図書館など、立教のシンボルともいえる一部外観の様子を立教の特徴として取り上げることは出来る。そしてその外観も、立教という学校のより本質的な特徴やその本質の維持発展の歩みに深くかかわりをもって形成されてきたものではあろうが、しかし、ただ単にその表層を捉えただけでは、立教という学び舎のよって立つキリスト教的背景や、何を目的とし、何を理想として設立され、今日までの歩みを続けてきたのかを理解することは難しい。このことが、立教のことを分かりやすく説明した刊行物の必要性を生む第一の要因であった。

一方、大学や学院サイドでは、「自校教育」の重要性が年々強く認識されつつある。在学生の諸君に、“自分の学校”について理解を深め、そのことによって自校への所属感や愛着を高めて欲しいとの願いは、学校という教育機関が当初から抱いている基本的要請である。しかし、創立以来の歴史が長くなり規模が拡大されるにつけ創立者の建学の理念が伝わりにくくなり、在籍者の所属感も希薄になる傾向が大きくなり、その要請を意識的に提示する必要が高まった。大学をはじめ高、中、小の各学校への入学が必ずしも本人の志望によるものではなく、入学試験の諸条件や主として偏差値による輪切りに支配される要因が大きく左右する状況下にあって、入学はしたもののその学校に所属することへの喜びや誇りはもとより、親近感や定着感さえも持てないまま、不本意感にさいなまれつつ学校生活を送るという在籍者の存在も無視できない。彼らは、そういった感情を学校側にはなかなか伝えようとはしないと思われるから、程度の差はあれ、潜在的にそのような感情をもっている学生はかなりの数にのぼるものと想定しなければならないであろう。このような現状を鑑み、学生諸君が現実の学生生活を自分のものとして受け入れ、それを足がかりとして、やがて充実した大学生活を送ることが出来るように手

だてを尽くすことは、さまざまな学生を受け入れている学院としての責務である。それが「自校教育」と総称され、授業、講演会、先輩や関係者による体験談、キャンプなどの共同生活、刊行物による学校紹介などとして展開されているのである。

刊行への経緯

大学を始めとする教育機関が「自校教育」を必要とする一般的状況については、これまでに述べたとおりであるが、立教ブックレットの刊行はいくつかの契機が重なって実現の運びとなった。

先ず第一に、学院の課題として、学院全体の構成員に、学院としてのメッセージを伝える手段の強化が望まれていたことがある。

第二には、本文の冒頭に書いたような「立教の特色は何か」という質問が度々学生から寄せられるとの報告が、学生諸君と直接に接触の多い部署（例えば学生相談所）で働く教職員からあり、学院としての対応を求められたためであった。学生相談所などの相談機関を訪れる学生の中には、自己の“居場所”やアイデンティティー形成の拠点を求めて所属校のイメージの明確化を図りたいという思いがあるのかもしれない。そのような欲求は、すでに所属感を強めている学生や、一見は無関心に見える学生たちにも存在しているかと思われる。

第三には、このブックレット刊行の提起者でもあり第二巻の執筆者でもある寺﨑昌男学院調査役（元教授）の次のようなレポートも刊行への動機付けを高めている。寺﨑氏は立教大学での現役教授時代に、立教大学の歴史をテーマに取り上げた講義をされた。日本の高等教育史の専門家として研究を積んでこられた同氏は、わが国の近代教育の展開過程に位置づけながら本学の歩みを辿られたのである。受講生たちの受講後の感想が紹介されたが、多くの学生は立教という学校のよって立つ理念や特色を講義を通じて知り、所属校への認識を改めて深めたとの事であった。その中の一人は、入学以来立教大学への親しみをもてず、疎外感を抱きながら学生生活を送っていたが、この講義を受けて以来、初めて立教への愛着をもつことができたとのことである。

そしてさらに、立教大学では文部科学省に申請した特色GP（Good Practice）「「立教科目」－建学の精神から学ぶ科目展開」が採択され、2005年度から4年間、約1500万円の補助金を獲得することが出来た。このことが、上に述べた、内的必要性を物理的に実現可能とする大きな要因となったことは言うまでもない。なお、この補助金により、当ブックレットの他に、「立教大学の歴史」（立教学院史資料センター　2007年3月刊）を発行も可能となった。

刊行編集作業

この「立教ブックレット」の刊行の発想がまとまった段階で、学院では教学常務会（当時）、理事会などに提案、了承を求め、「立教ブックレット」刊行プロジェクトチームを組織することとなった（メンバーの氏名は文末に掲載）。プロジェクトチームでは、まず、発行の目的の確認を行い、続いて、テーマ、タイトル、対象となる読者の想定、体裁、刊行の年次計画、予算、などについて協議を重ねた。当初は、ブックレットの形態として新書版の立教案内のような内容を考えていたが、トピックの多様性、ハンディな読みやすさなどの点から、シリーズ形式のブックレットの形態とすることになった。また先に

述べたGPの採択と、それによる出版費用負担の可能性に関する情報を得たのは、プロジェクトチームが発足し、検討を開始してしばらく時間がたってからのことであったので、プロジェクトチームでは、そのことを大いに喜んだ。プロジェクトチームでは、草稿の点検も含め、発足以来、これまでに16回の会合を続けてきている。

当ブックレットの第１巻は立教の創設者C.M. ウィリアムズ主教を取り上げたもので、2007年３月に刊行された。元立教中学校教諭伊藤俊太郎氏による「道を伝えて己を伝えず―ウィリアムズ主教の生涯―」（1989年発行　立教大学チャプレン室編）をベースに松平が大幅に加筆したものである。第２巻は寺﨑昌男「立教学院小史」、第３巻は老川慶喜「立教人物史①　立教の経済人岩下清周と松崎半三郎」、いずれも2008年２月刊の予定である。以下、聖公会という教会、立教学院の教育の理念、立教建築物語、立教の動植物、立教を支えた宣教師たち、立教とスポーツ、などのテーマが想定されている。

まとめ

この出版物の刊行によって、冒頭に述べた自校教育を主眼とした当初の目的が達成され、本学院への理解の深化と親しみがより多くの構成員によって増し加えられ、そのことを通して本学院がますますその建学の精神にのっとった教育を押し進め、発展してゆくことを心から願っている。

「立教ブックレット」プロジュクトチーム　メンバー（あいうえお順／2006年５月発足当時）

上田亜樹子（大学チャプレン）、鵜川佳彦（大学広報課職員）、老川慶喜（大学経済学部教授・学院史資料センター長）、鈴木武次（新座中学校高等学校教諭）、寺﨑昌男（学院・大学調査役）、中島博（池袋中学校高等学校長）、藤原芳行（大学全学共通カリキュラム事務室職員）、松平信久（学院長）、宮嵜知子（大学学生相談所職員）、諸橋保夫（小学校校長）　事務局・伴義裕（学院本部職員）

まつだいら　のぶひさ
（立教学院学院長）